【 24 】

氏　　名　柴田芳成（しばたよしなり）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文博第245号
学位授与の日付　平成15年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目　お伽草子研究序説

論文調査委員　（主査）教授 木田章義　教授 日野龍夫　助教授 大谷雅夫

論文内容の要旨

お伽草子とは，室町時代から江戸時代の初期にかけて制作され，以後も読み続けられた物語群の総称であり，その作品数は四百編を超えるともいわれる。これらの物語群は，その成立，流布の時代から，「中世小説」，「室町時代物語」と称されることもある。

お伽草子は，挿絵とともに享受された文学であることや，近世の出版目録に「渋川版」を指して「女中身を治る便とす」などといった惹句がみえることなどから，婦女子向けの幼稚な物語群と見なされていた時期があったが，今日では，お伽草子の作品世界が中世の古今集注釈や伊勢物語注釈といった学問とも密接に関わる部分のあること，謡曲や狂言，幸若舞曲などの芸能とも通じる面のあることが明らかにされつつあり，その世界が広く，深いものであると認められている。本論文は，これらお伽草子と呼ばれる作品群の成立，構造，背景などを明らかにし，お伽草子の研究の基礎を作り上げようとしたものである。

第一章第一節　『緑弥生』の考察――物語の構成――

『緑弥生』は新出のお伽草子作品である。相思相愛の男女が，後に男は失恋死し，女は入内して栄達するという内容であり，通行のお伽草子作品の六分類に照らせば「公家物」に属し，物語構成としては，いわゆる「しのびね」型ということになる。本章では，この新出の物語作品を「公家物」の中に定位することを目指した。

まず本節では，女主人公・緑姫の境遇を目安に，従来「しのびね」型として知られるお伽草子である『しぐれ』，『若草物語』，『桜の中将』，『志賀物語』と『緑弥生』を比較して，その特徴を検討した。その結果，男主人公がいとこ関係にあり，その妹が両親に先立たれた姫に優しく接するという設定をもつ前半は『若草物語』と近く，男主人公との別離後，姫が御門に見出されて入内し，先に入内していた男主人公の妹以上に寵愛を得て栄えるという後半の筋は『しぐれ』と相似た構成をもつことが明らかになった。つまり，「しのびね」型の二作品を折衷した様式となっているのであり，このことは本作品の後出性をうかがわせるものといえる。また，男主人公が失恋死するという設定は，これらの「しのびね」型お伽草子にはみられず，本作品独自の大きな特徴に挙げられる。

第二節　『緑弥生』の考察――物語の生成――

前節に確認した通り，『緑弥生』は「しのびね」型の物語であるが，本文そのものについては，物語前半に「しのびね」型とは異なる物語構成をもつ『ふせやの物語』と近似した表現のあることが指摘できる。この『ふせやの物語』は，「公家物」のお伽草子作品中，「しのびね」型と相並んで人気を博した「継子物」という類型に属する作品である。

『緑弥生』と『ふせやの物語』を比較すると，姫と母との死別場面，姫が両親の供養をする場面に相似の文言がみられるのだが，物語展開そのものは異なるだけに，表現の重なりには一層注意される。また，男主人公の妹である「弥生姫」の造型には，「継子物」の「主人公（継子）に対峙する人物（実子）像」を認めることができる。さらに，作品名『緑弥生』は，二人の姫の名を並べたものであるが，これは「継子物」の昔話にしばしばみられる話名法（継子と実子の名を連ねる）であ

る。これらのことから，「しのびね」型物語である『緑弥生』の背景には，「継子物」の世界とも通じる面のあることがうかがわれる。

ところで，物語中の和歌には，中世末期から近世初期の様々な作品にみられる流行歌謡的な和歌が用いられていること，『新古今和歌集』所収歌との一致がみられることなどが確認された。

これらの考察から，『緑弥生』とは，「しのびね」型と「継子物」という，「公家物」の二大類型を兼ね備えた物語として構想され，当代性のある歌謡をも取り込んだ新作物語であったということができる。

第二章『付喪神記』の考察――諸本本文の先後関係への一考察――

『付喪神記』の諸本には，二系統（A系・B系とする）のあることが知られる。A系は室町期書写の一本が残るだけであり，B系には近世の書写にかかる伝本が複数存在する。両系統間にみられる最も大きな相違点は，「B系の物語の一部がA系にはない」ことであり，このため，いずれの系統が作品本来の形を伝えるものか問題とされてきた。

現在は，物語展開に飛躍のないB系を先行と見る立場が優勢である。ところが，両系統の物語構成を検討し，詞書本文の比較対照を行ったところ，必ずしもB系先行とはいえず，むしろA系先行と想定する方がよい例がみられる。また，物語中の「清凉宗論」説話の典拠と考えられる東寺本『弘法大師行状絵詞』中の同話との本文異同をみると，A系の方が『行状絵詞』に近いのである。以上のことから，A系本文の方が古態を留めると考える方が妥当であろうと思われる。「B系の物語の一部がA系にはない」ことによる物語展開の飛躍は，何らかの事情によって，A系の当該箇所が欠落したものと考えておきたい。

従来の論では，現存する唯一の伝本をA系本来の形とみなして，両系統の先後関係が問われていたが，そこでは本文そのものの問題と，現存本の物理的状況という二つの異なる問題が混交されていたといえるだろう。

また，挿絵（妖物の行列図）について，絵手本としては，これまでに類似が指摘されている祇園御霊会図や稲荷祭礼図よりも，『北野天神縁起絵巻』諸本のうちに近い図柄のあることを挙げた。

第三章『祇王』の考察――『平家物語』からお伽草子へ――

『平家物語』は中世以降の文学に多大な影響を残した作品であり，お伽草子の中にも『平家物語』と関わりをもつ作品が少なくない。本章では，『平家物語』「祇王」段に基づいて制作された『祇王』の物語について考察した。

まず，『祇王』諸本の本文系統を整理することを試み，各伝本の本文を『平家物語』諸本と比較した。その結果，『祇王』諸本には，読み本系『平家物語』に取材した伝本はなく，いずれも語り本系『平家物語』本文に依拠していることが明らかになった。具体的には，八坂系本文に依拠するもの三本（いずれも八坂系第一類B種），一方系本文に依拠するもの三本（葉子十行本あるいは京師本に基づく一本，流布本に基づく二本）に整理することができる。

また，『祇王』諸本はいずれも，物語内容において『平家物語』からの逸脱はない。このことは，例えば『小敦盛』が，同じく『平家物語』に基づきながらも，『平家物語』とは別の物語世界を築こうとした姿勢とは異なるものである。ただし，『平家物語』中にあって，平清盛の専横を示す一挿話との位置付けがなされていた「祇王」段が，祇王の境遇を描き出した挿絵を伴った一編のお伽草子作品に仕立てられたことで，祇王説話が本来もっていた女人遁世譚の性格がより鮮明になったということはいえるだろう。

第四章『武家繁昌』の考察――軍書『本朝武家根元』との関わり――

従来の『武家繁昌』論としては，作品中にいくつもの説話が列挙される点をもって説話集的であると認定したり，引用説話の一部のみを取り出して，中世の他の文献中の説話と比較したりという方法が取られるばかりであった。あるいは，辞典類の項目として立てられて，「武門の歴史」を語る作品と印象的に記される程度であって，作品全体が問い直されることはほとんどなかった。

本章では，作品中での「武家繁昌」の語の用例と，事物の由来を説く文句に注目することから全体像を問い直し，本作品が単に時系列に沿った「武門の歴史」を記した物語ではなく，様々な武勇のおこりを経て，頼朝による「武家繁昌」の世が始まったことを述べる，起源の物語であることを明らかにした。

また，本作品の成立に関わる問題として，近世の軍書の中に本作品と極めて近い本文をもつ作品（『本朝武家根元』）のあることを指摘した。両作品の本文を比較すると，相互に記事の出入りや，文言の異同がみられるため，一方から他方へとい

う直接的な関係にあるのではないと考えられる。将軍の系譜や源氏と八幡の関わりの件など，部分的には『北条九代記』にも同内容の事項がみられる。そうした事情を勘案すると，戦事の語りとして何らかの共通する素材の存在したことも想定されよう。『武家繁昌』と『本朝武家根元』とは，そうした戦事に関する素材に依りながら，一方は頼朝に始まる武家の物語として，他方は事物の起源を語る軍書として，それぞれの構想の下に生み出されたものとの考えられるのである。

付篇『精進魚類物語』二条良基作者説への一資料

資料紹介。異類軍記物である『精進魚類物語』の作者には，近世以来，二条良基と一条兼良の名が挙げられる。近世中期の『弁疑書目録』，『類聚名物考』では，『精進魚類物語』を兼良作とし，『魚鳥平家』（『精進魚類物語』の別名）を良基作とするように，混乱がみられる。また，近世以前の資料である『梅庵古筆伝』には良基の著作とする。

ここに紹介した資料は，京都大学平松文庫蔵『公事根源』に綴じ込まれた一葉であるが，慶長十七年（1612）書写という近世極初期のものとして貴重である。そして，ここでも『梅庵古筆伝』と同じく，良基の著作と記載されることが注目される。

論文審査の結果の要旨

本論文は，室町時代末から江戸時代にかけて大量に出版された「お伽草子」とも呼ばれる「室町物語」類の研究である。室町物語には，巻物の奈良絵本や冊子体の絵入り本，刊本や丹緑本など，多種多様な出版形態があり，写本ごと，刊本ごとに筋が違い，絵がちがっており，いまだ全容が明らかになっていない資料群である。これらの物語の特徴は，寝ていて果報を得たり，寺社に願を掛けて子供を得たり，継子いじめの果てに栄華を極めるというような，当時の庶民の願望が，率直に物語の中に表れるところである。

第一章では，本学文学部図書室で新たに著者が見いだした，「緑弥生」の紹介と分析を行っている。これは新出というだけで価値の高いものである。この物語の構成は，相思相愛の中で，男は恋死をし，女は入内するという「しのびね」型の物語であるが，文章や構成に，継子型の「ふせやのものがたり」との共通性が強いことを明らかにした。そこで，この「緑弥生」は「しのびね」型と継子型の両類型を折衷し，当時流行の歌謡も取り込んで，江戸時代中期に作られた新作であろうと結論している。単なる「しのびね」型と分類されるところを，先行作品の丁寧な読み込みから，継子物との類似に気づいたことは，著者の研鑽ぶりを窺わせる。

第二章では，「付喪神記」という作品を扱っている。棄てられた反故類が人間を怨んで襲うという話であるが，「付喪神記」には二系統の物語があり，どちらが原型かは意見が分かれていた。著者は「弘法大師行状絵詞」の文を引用しているところに着目することによって，A系統の諸本が原態を保っていることを明らかにした。さらに，文章中の言葉から，真言宗との関わりが深いこと，そして，挿絵の図柄は，従来「祇園祭礼図」や「年中行事絵巻」に似ていると言われていたが，それよりも「北野天神縁起絵巻」の図に似ていることを指摘し，この物語の背景をより鮮明に描き出し，これからの研究を進めて行くための基礎的な事実を明らかにしている。本文だけでなく挿絵までも考察するのは，非常に広範な調査を必要とするもので，地味な努力を積み重ねていることが分かる。

第三章では，平家物語で有名な白拍子「祇王」を主題にした「祇王」という物語を調査し，これらの物語は，読み本系の「平家物語」ではなく，語り本系の「平家物語」に依って物語が作られていること，「祇王」諸本の中でも，八坂流系統の「平家物語」本文に依るものと，一方流系統に依るものとがあることを明らかにした。平家物語から祇王の部分だけを取り出してお伽草子に仕立てることによって，祇王説話が本来持っていた女人遁世譚の性格が明瞭になっているという作品論も付す。

第四章では「武家繁昌」という作品をとりあげ，この作品の背景には，「本朝武家根元」があったこと，そして，江戸時代初期には，「武家根元」だけでなく，近い過去である乱世の武家・軍功に関する伝承・書籍が多くあり，その世界の中で，この作品は書かれていることを明らかにした。

附篇では，「精進魚類物語」という物語の作者について論じる。著者は，本学附属図書館平松文庫の「公事根源」に綴じられた一葉に，一条経嗣，一条兼良，二条良基の著作の一覧を発見し，それが近世ごく初期に書かれたもので，天正一九年に書かれた「梅庵古筆伝」の内容とほぼ一致することに気づいた。そこでは良基の著作としてこの物語が挙げられており，

これ以外の著作は彼らの手になることが確認できることから，この物語が良基の著作であった可能性が高いことを示した。もしこれが正しければ，時代を代表する文学者がお伽草子を書いていた事になり，しかも，室町時代初期からこのような物語が作られていた事になる。未だ確認する作業は必要とはいえ，極めて重要な情報である。発見してしまえば当たり前のことではあるが，日頃の研鑽がなければ，目の前の一葉の資料を見逃していたはずである。

以上のように，本論文は室町物語の諸作品・諸本の分析を丁寧に行い，曖昧な形になっていた問題に解答を与え，新しい知見を提示しているが，大量の室町物語の中では，まだ一部の分析に過ぎないこと，そのために，当時の庶民の夢や思考法などの分析は一部に止まっていることなど，これからの一層の発展を必要とする。

以上，審査したところより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2003年２月19日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。